

「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」 (2013年度第'回研究会)

日時：2013年10月12日（土）13：30 - 18：00

場所：AA研 小会議室（302）

報告者：澤田望（東京大学）

報告タイトル：「歴史史料としての黎明期ナイジェリア新聞」

「歴史史料としての黎明期ナイジェリア新聞」

本報告は、黎明期のナイジェリア新聞を史料として扱う際の可能性と問題点について、植民地初期ナイジェリアの新聞における記念事業団体活動の記事を中心に論じるものである。冒頭で、アフリカ史における様々な史資料を確認し、その後、記念活動団体に関する記事の変遷と、当時のナイジェリア新聞の特色について言及した。

南西部ナイジェリアにおいて1880年から1920年初頭までの約40年間は、アフリカ人による新聞出版事業の黎明期であった。現在ナイジェリアと呼ばれる地域では、この時期に20紙ほどの新聞が創刊され、その多くが、教養文化の中心地であるラゴスで発行された。見開き2ページほどから始まった初期の新聞は、時に定期刊行物の役割を担うことが困難な経済状況に陥りつつも、週刊、もしくは隔週で発行された（日刊紙の登場は1925年を待たなければならない）。また、その読者層を、比較的恵まれた植民地内外のアフリカ人、および英領西アフリカや欧米に居住する植民地関係者と想定していたため、出版言語も主に英語であった。概して親英的な論調を持つ19世紀後半の新聞は、当初アフリカ人エリートのコミュニティーペーパーの役割を担っていたが、植民地化の深化に伴って、20世紀初頭には世界情勢にも注目する記事が増え、一方でローカルな慣習に着目する独自の報道路線を選択する新聞も刊行された。初等教育の拡大により Yoruba 語の読み書き人口が増加し、1920年代に Yoruba 語・英語のバイリンガル新聞6紙が相次いで創刊される礎を築いた時代でもあったと言える。

このように、ラゴスを中心とした新聞出版が始まった1880年代以降、医師・学校長・宣教師などとして活躍したアフリカ人エリートを記念するため寄付金を募る団体が設立され、新聞各紙もこれらの記

念事業を連載し始める。その中でも大きく報道されたのは、中等教育の発展に尽力した T. B. マコーリー記念活動、ナイジェリア初のアフリカ人医師であったナザニアル・トーマス・キング記念協会、現在でも使用されているグラヴァー・メモリアル・ホールを建設したグラヴァー・メモリアル基金であった。20世紀初頭になると、上層部アフリカ人エリートを称える記念団体の記事だけではなく、読者が自らの家族を偲んで投稿した記念詩が掲載されるようになり、新聞に現れる記念・顕彰行為のかたちに変遷がみられる。

本報告では、アフリカ人エリートの記念活動に関する新聞の叙述の特徴とその変遷を辿ることで、これまでヨルバの記念・顕彰行為と比べて等閑視されてきた彼らの記念事業を明らかにするとともに、政治的主張のメディアとして注目されることが多い黎明期ナイジェリア新聞の再評価を試みた。当時の新聞は、情報のメディアとしてのみならず、永続的に情報が保管されるアーカイブとしてみなされていた。また新聞は、過去の修正および再創造による集合的な自己分類化や、時には個人的な自己形成のツールとしての役割を担っていたのである。

本研究は、一次史料を駆使した歴史的事実の検証という社会史の方法と、新聞記事の言語表現パターンを扱う言説分析という質的研究方法に加えて、ナイジェリア新聞における特定のトピックや単語の出現頻度を対象とする内容分析を組み合わせた手法を採用することにより、任意団体活動の実態と表象、その言語表現から、ラゴスにおける発展思想の歴史を辿ることを試みた。新聞は、ある集団の実態面だけでなく、表象という観点からも集団を捉える上で有用な史料となりうる。ある集団に参加していることがいかなる意味を持つのか、その集団がどのようなものとして認識され、描写され、それらがいかなる変遷を遂げたのかを考察することは、史料的制約のため事実確認が難しい事象を考察する際に有益である。

本報告で扱った主な史料として、1880年から1920年にアフリカ出身者が定期的に刊行した英字新聞7紙 (*The Lagos Times and Gold Coast Colony Advertiser*, the *Eagle and Lagos Critic*, the *Lagos Observer*, the *Lagos Weekly Record*, the *Lagos Standard*, the *Nigerian Chronicle*, the *Nigerian Pioneer*) が挙げられる。本報告では、新聞以外の補完的史料の中で、ナイジェリア国立史料館(イバダン分館)とイバダン大学ケネス・ディケ図書館で入手したCMSアルバムの写真やアフリカ人エリートの手稿史料の状態および欠損状況を紹介した。

2013年10月現在、サブ・サハラアフリカで出版された新聞66紙が収められているアフリカ新聞データベース(World Newspaper Archive, African Newspapers 1880-1920)の出現により、新聞史研究の調査方法に広がりが見られる。内容分析と量的研究が容易になり、特定の時間軸におけるある話題の頻出度合いなど、統計的データが入手可能になった。一方で、キーワード検索機能には不備が度々発生し、各

ページのダウンロードに時間を要するため、あくまで補完的な利用が好ましい。各新聞の形式の違いや長期的な傾向、扱う時代の背景・雰囲気を概観するためには、新聞原本もしくはマイクロフィルムの利用が必須である。

本報告では最後に、今後のナイジェリア歴史新聞を扱った研究の方向性として、長期的な視点を持つ地域横断的な共同研究の必要性を確認した。

(文責は報告者)